

会報 秦野

令和2年4月1日 第50号



市内に遺された葉タバコの乾燥小屋

秦野歴史おこしの会

羅茶曼體立の海空と坐像如来智五毛蓑



秦野みのげ文化の会会長
東海大学 名誉教授

三亮本松

蓑毛の大日堂には、大日如来坐像を中心に、向かって左側に釈迦如来と阿彌陀如来、右側に宝生如来と阿閼如來の坐像が置かれている。金剛界曼荼羅の中心の成身会に描かれた五仏、五智如来の坐像である。天保十二（一八四一）年に成立した『新編相模国風土記稿』には、大日堂は、覚王山安明院と号し、本尊の大日如来大佛像は行基が天平十四（七一四）年十月に造り終えて供養したものであり、堂内には阿閼・弥陀・虚空蔵雲自在佛も安置されていると記述されている。『宝蓮寺真名縁起』に、東大寺の大仏造営に当たった行基と良弁が聖武天皇の勅命を受けて

相州に来て、天平十四年正月に「覚王山五智金剛界の大日如来大佛像」が像立供養されたと述べられていることがこの記述の背景にあったと思われる。一方、秦野市の調査では、大日堂の五智如来坐像は、平安時代後期の作であるとされており、奈良時代の作とする前二書よりかなり時代が下ることとなる。五智如来の信仰は、密教の教えを絵解きした曼荼羅に基づいており、これを我が国に伝え流布したのが、弘法大師空海であったことを考えれば、覚王山安明院の開山が奈良時代に遡るにしても、ここに現存する五智如来像が奉獻されたのは、空海以降であったと考えるのが妥当だろう。

空海は、延暦二十三（八〇四）年の遣唐使船で、学問僧として唐に渡った。彼は長安、青龍寺の恵果阿闍梨に師事し、真言密教の奥義を伝授された。恵果は、真言の教えは經典や注釈書に詳述されていないので、図画を用いてしか伝えることができないと考え、李真などの画工に曼荼羅や法具を造らせた。この図画が両部（両界）曼荼羅、すなわち胎藏曼荼羅と金剛界曼荼羅である。胎藏曼荼羅は『大日経』に基づいて、大日如来の悟りが展開していく理を表したものであり、金剛界曼荼羅

は、『金剛頂経』に基づき、大日如来の悟りの知恵を示していると言われる。恵果は八〇五年に亡くなるが、その法統を継いだ空海が現図曼荼羅等を持って帰国したのは、大同元（八〇六）年のことであった。

空海は帰国後朝廷で地歩を築き、弘仁十四（八二三）年、嵯峨天皇より東寺を下賜されると、講堂に金剛界曼荼羅の世界を仏像で表した立体曼荼羅（羯磨曼荼羅）を造営しようとした。須弥壇中央に大日如来を中心とする五智如来、東側に金剛波羅蜜多菩薩を中心とする五菩薩、西側に不動明王を中心とする五大明王を安置し、須弥壇の周囲に梵天、帝釈天、四天王を配する立体曼荼羅の開眼供養が行われたのは、承和六（八三九）年、空海入定の四年後のことであった。これ以降、平安時代末までに、京都市の安祥寺、奈良吉野の大日寺、岡山県瀬戸内市の弘法寺などで五智如来が造立され、現在も残っている。しかし、関東の五智如来像は中世以降に制作されたものがほとんどで、平安時代の五智如来像を完全に残めている大日堂はきわめて稀有な例である。その保存に努め、これを後世に引き継ぐことは、まさにわれわれの責務であると言えよう。

「古写真から見る幕末・明治

初期の神奈川」を聴講して

小沢恵一

当会発会から二十五周年が奇しくも令和元年にあたるこの記念すべき年、秦野市に縁のある東京大学史料編纂所所長 保谷徹氏の講演を拝聴しました。演題「古写真から見る幕末・明治初期の神奈川」



保谷徹先生

保谷徹先生のプロジェクトは、一八九六（明治二）年オーストリア・ハンガリー帝国と修好通商条約を結んだとき随行したオーストリア写真家が撮影収集した、日本風景や産物等のガラス板ネガ二百七十点をオーストリアの国立図書館で見つけた。当時の日本人写真家の撮影したものも含め、平成二十二年から最新鋭のデジタルカメラ技術

（八〇〇〇万画素）で拡大撮影して解明する、新しい「写真史学」の研究を通して近代史の研究に貢献されております。

先生の発刊物「一五〇年前の幕末・明治初期日本」の秘蔵コレクションから神奈川県の写真を大型プロジェクトで解説。宿場の風景や寺院の写真を十九世紀当時のガラス版ネガのものと、それをデジタル化した現代技術（八〇〇〇万画素）でズームアップしたものを比べて見る。肉眼では確認できない箇所、宿場町の店の看板の文字がハッキリ見える。寺院では壁の落書きに至るまでじつに細部にしかも克明に写しだされていたその映像の世界に驚きの声があがった。当時の日本橋、愛宕山から見た武家屋敷、横浜港の全景、庶民の生活や人物の表情等が江戸や横浜だけでなく鎌倉、小田原、箱根等の地方や、長崎までの有名地まで廃仏毀釈や廃刀令以前のまさに幕末そのままの姿が貴重なネガに凝縮されていた。先生の説明では昔のガラス版ネガには、「銀の粒子レベルの膨大な情報が含まれている」と言う。良く理解出来ないが「ガラス原版の素材に凝縮され埋もれていた情報を現代技術で甦らせたい」とすごい技術だ。これら保谷先生の



箱根 塔ノ沢

「150年前の幕末・明治初期日本」から



水田として使われていた

小田原城のお堀の写真を説明

研究成果は、日本の文化遺産・歴史遺産そのものであると思った。先生ほかプロジェクトの皆様にご敬意を表します。

最後に来賓の秦野市長高橋昌和様はじめ、保谷先生に関係の方々が多数参加され、熱い視線で聴講されていたのが印象的でした。

大本山川崎大師平間寺と生麦事件参考館見学会に参加して

市川 實

令和元年十月十日木曜日。天候は晴れ、絶好の歴史探訪日和の中、二十四名が参加されました。最初に見学したのは、大本山川崎大師平間寺。宗派・真言宗智山派、寺号・金剛山金乗院平間寺、宗祖・弘法大師空海（奈良時代）、中興の祖・興教大師覺鑊（平安時代）



川崎大師

川崎大師を生まれて初めて見学したのは昭和三十三年、六十二年、六十二年、高橋卒業後川崎のデパートに入社した時、父兄同伴で見学した時でした。当時はまだ戦後の復興の真っ只中で、境内は塀もなく本堂がポツンとあって、池の周りは草が生えていて他のお堂などほとんど無く、さみしい印象しか残っていませんでした。今回見学してビックリ仰天、今浦

島太郎で、大本堂は昭和三十九年に落慶し、大山門、不動堂、八角、五重塔など二十棟近くの建物が見事に揃う壮観な様子で感激しました。

見学した中で大変印象に残った物が二つあります。昭和二十年三月の空襲により寺全体が火災で壊滅状態の中で残ったお堂と、焼け残った木がありました（住職の話）。お堂は「福德稻荷堂」江戸時代の建物、木は銀杏の木で、半分焼け焦げたが見事に生き返り、大木として育っていました。仏様の御加護があったと思われます。最後に、生まれて初めて大本堂の三段にて特別に大護摩祈願参拝をさせていただき、大変感謝しております。

「東海道川崎宿について」

東海道五十三次の一つで、品川宿に次ぎ二番目の宿です。他の宿場との違いは「徳川幕府の命」で作られた宿であることである。いろんなやからが江戸に出入しないように監視する重要な宿であった。相模国と結ぶ大河多摩川には、今から四百九十年前、慶長五年（一六〇〇年）に六郷大橋が架けられたが、八十八年後の貞享五年（一六八八年）大洪水で流されて、橋はそのまま架けず、舟で行き来させた。百八十八年後の明治七年（一八七四年）に橋

が架けられた。数多くある幕府の政權安定維持策の中で、川崎宿の役割は大きかったと思います。現存する遺跡（建物）は全くない中で六郷の渡し場の跡は是非見たかったが、駐車場がないのと時間がない関係で見られず、残念でした。次の機会にと・・・

「生麦事件について」

今まで自分は武士が外国人を無礼打ちした事件と記憶していたが、実は大変な事件であった。「生麦事件参考館館長・浅海武夫氏（八十九歳）の「ドキュメント生麦事件」の講演ビデオから。

イギリス人「リチャードソン」ほか三名が「川崎大師」見物に行く途中、薩摩藩主島津久光の家臣の無礼打ちを発端に、イギリスと薩摩藩の薩英戦争がおきた。薩摩藩が破れて日本は今のままでは欧米列強に対抗できないと尊王討幕思想を強くし、薩摩主導で薩長同盟を組んで、その結果、明治維新へと突き進んで近代国家日本を生み出した。

一つの寺、神社、城、遺跡など、歴史には奥深い物語がある。時間をかけて調査し、地味なことではあるが、次の世代に残せるよう、秦野の歴史おこしをやっていききたい。今回の見学会は、その意味で大変有意義でした。

尺八と秦野市

星 秦山

秦野市は古くから尺八にゆかりのあるまちのようです。約九百六十年前、わが国の尺八の発祥の寺とされる紀州和歌山由良町の興国寺は、鎌倉三代將軍実朝公が甥の公卿に暗殺されたことから、実朝公の近臣葛山五郎景倫が剃髪して願主として高野山金剛三昧院で主君の菩提を弔った。これを知った実朝公の母、尼將軍北条政子が籠院の糧に由良の地頭を与えられたことに起因する。三浦の家臣武常晴と大津兵部が、



箱根駒ヶ岳山頂の箱根元宮にて
右端が筆者

実朝公が武勇の誉れ高き武者として目をかけていた波多野忠綱の屋敷に実朝公の御首を持参して、供養を願い出た。波多野忠綱は自分の屋敷の前に五輪塔を建て、其の奥に実朝公が帰依していた退耕行勇師を開山に金剛寺を建立して手厚く弔った。

約五百年前、現在尺八の琴古流の創始者黒沢琴古が鈴法寺の江戸番所の下で「尺八吹合所」と呼ばれる稽古所を設けていた者の一人で各地の尺八本曲のかなりものを収集し、秦野の蓑毛の大日堂宝蓮寺、伊勢原の神宮寺等でご住職に尺八の手ほどきを受けた記録が残っている事。約百三十年前、現在のイオン秦野店にあたる場所で日本専売公社の秦野工場が出来、当時の工場長が尺八を趣味で演奏し、社員にも又地域の人々に勧めたことから普及し、多くの社員が尺八を習い、全国に広げた歴史もあるようです。

約六十年前、尺八の学者で名高い高橋空山氏が渋沢に居住し、虚無僧尺八の理論を研究し昭和四十七年、ミュンヘンオリンピックに因んだ「世界文化と芸術展」に東洋音楽の代表として選ばれ、世界各国に日本伝統音楽である尺八を紹介した事。同時期に戦争で東京より市内本町に疎開した犬飼虚無洞



箱根神社にて 尺八の奉納演奏

氏が奏者として数々の曲を発表、秦野市は尺八の街として認知されるようになったようです。約二十年前には、第二十六回全国高等学校総合文化祭の神奈川大会が秦野市文化会館の大ホール、小ホールで平成十四年八月九日と十日の二日間に盛大に行われました。秦野市の竹材は尺八に適しております。尺八に関して些細な事でも知っている事がありましたら、お教えいただければ幸いです。

堀西大日堂跡地に佇む石碑

岩田宇一

堀西欠畑地区に浄土宗桂林寺持ちの大日堂がありました。明治維新後、廃仏稀釈により廢堂となりお堂は解体され、ご本尊の大日如来は桂林寺預りとなりました。そして、この土地は個人所有の山林として現在に至っています。昭和三十年代までは地域の方が念佛供養を毎年されていたようです。その後途絶え、山林もかつてはくずかきや、まき山として管理されていました。が、今はここに人が入る事はほとんど無く大日堂があった事が忘れられようとしていきます。



桂林寺預かりとなった石造大日如来坐像
(像高85.0cm 江戸時代)

しかし、この山林には今でも南無阿弥陀仏と刻まれた石碑(六字名号碑)があります。他に首から上が無い石仏、

六十六部供養塔安政二年(一八五五年)、大乘妙典日本廻国嘉永六年(一八五三年)と刻まれた石碑などがありますが本稿では六字名号碑について紹介します。



大日堂跡地に佇む石碑

石碑は秦野市内では珍しい六面石幢と呼ばれる六角柱で面の寸法は幅十六cm、長さ五十七cmでその上に笠が乗せられています。台座から笠までの全長は約百十cmです。石碑には元禄六年癸酉七月、念佛講供養、同行三十六人敬白と刻まれています。また、裏側の三面には阿弥陀經の一節「經曰 應當發願 願生彼國所以者何得与 如是諸上善人俱会一处」と施主念譽近正、法譽□□が刻まれています。石は硬い材質のようで表面の風化が少なく文字がはっきりと読み取れました。秦野市教育委員会は平成十一年三月に秦野の石仏(三) 西・上地区編を発行されていま

すが、この調査から漏れていて記載されていません。

私がこの大日堂跡地にたどり着いたのは、まほら秦野みちしるべの会が発行された創立十周年記念誌(註)です。すでに堀西のどこかに大日堂があった事は新編相模国風土記稿に記述されており認識していましたが、場所についての情報がなく偶然この本に巡り合え、現地確認ができました。この場所は市道十八号線の三廻部に向かう才戸橋手前の山林で、四十八瀬川を眼下に街道の見張り番所となるような要件を備えています。秦野市内で確認されている最も古い六字名号碑は寿徳寺(大秦町三・一二)の延宝六年(一六七八年)で、元禄六年(一六九三年)は二番目にはいります。また念仏講が建立したものでは最古の石碑だと思われます。私有地に残る江戸時代の遺跡ですが、郷土史愛好家の皆様には是非見て頂き、出来る限り保存していきたい文化財の一つとして紹介するしだいです。

註：創立十周年記念誌 まほら秦野みちしるべ ―古道・大山道を歩く―
二〇一六年十一月発行
まほら秦野みちしるべの会(会長 横山信子)

葉タバコ作りの思い出

横溝 彰

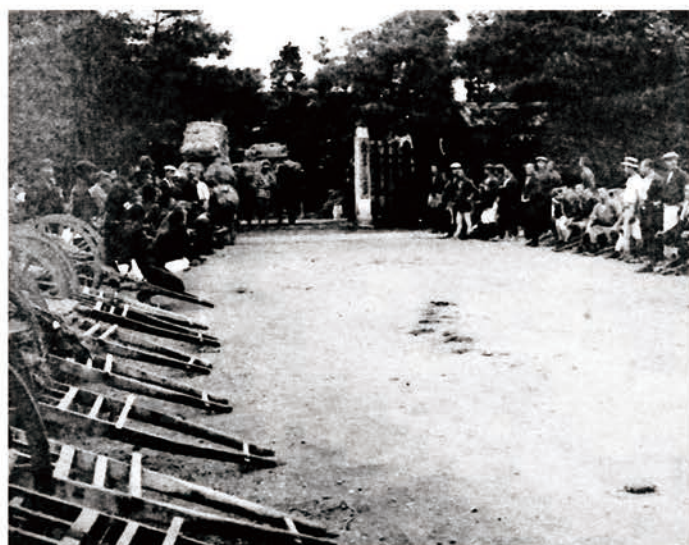
「そよぐタバコの畑越えて、かがやくみどり阿夫利丹沢」勝承夫作詞の南中学校校歌の一節だ。南地区は同級生の多くが農家の子弟で、大半の家で葉タバコを栽培。学校の農場でも野菜の他に葉タバコを栽培し、農業実習として夏休みに兄は葉の乾燥の為に乾燥室の管理に交替で泊まり込んでいた。

秦野の葉タバコ栽培は市の主要産業であったが、昭和四十九年に秦野葉、昭和五十九年には黄色種の終了でタバコ耕作の幕を閉じた。同年専売所が閉鎖（現イオン）となり令和元年に名古屋の研究所在閉鎖されることでタバコ関連の主要施設が姿を消すこととなった。

葉タバコの栽培は正月に山でくずかきといって落葉をかき集め、苗床に落葉を敷き詰め、堆肥で覆い、種まきをした。四月には苗を大麦畑に移植、遅霜のニュースを聞くと四時起きて家族総出で雑紙を苗の上にかけて霜害を防いだ。六月に麦を収穫すると、成長した葉タバコが現出、このタバコ畑と背後の大山丹沢の山並みが当時の風物詩であった。七、八月は葉の収穫で下か

ら順に下葉、中葉、本葉、天葉と葉掻きをした。下葉を掻くときもぐりという蛇がいたり、時には雲雀の巣から卵を失敬して味噌汁に入れて食べたこともあった。掻いた葉は縄に編み込み、納屋の柱に渡し込んだ竹に掛け吊るした。天日頼りの秦野葉は晴れば麦藁を敷いた庭に広げた。盆を過ぎると葉は納屋に収まりきらず母屋の座敷に吊るされ、私たちは葉の下で寝起きした。郷土の歌人、前田夕暮は「うつばりに青き烟草を吊したりそのもとにゐて楽しかるべし」（秦野駅南口に歌碑）と「おのが寝る部屋の上にも烟草の葉青々とつり安寝すらしも」と詠んでいる。

葉の乾燥が済むと葉の選別。色艶の良し悪しで選り分け、葉を一枚一枚のばした。葉のしは二人で行い、纏める茎側が父で私は葉先の方に座らされ、予定をこなさないと学校へ行かせてもらえなかった。仕上げた葉タバコを稲藁で包装、暮と正月の二回に分けて専売所へ収納した。どこの家も牛車で運んだから専売所の入口には牛を繋ぎ留めておく柱が立っていた。父は葉タバコの等級が良い時は、四つ角にある戦友仲間の橋本屋で饅頭を買ってすぐ帰ったが、悪い時はやけ酒での午前様。こうしことが父の胃潰瘍の要因だと母



葉タバコの収納風景（大正7年頃）
秦野市所蔵

が呟いていた。父は四十一歳で他界。父亡き後は母と私たちで近所のタバコ耕作指導員の話聞いて葉タバコ栽培を続け、品評会で上位の賞に入選することもあった。人の意見を聞かない父のタバコ作りは何だったのかと思った。

葉タバコの収納は兄と私の仕事で、朝早いのが良いと出かけたが、四つ角の交差点で車のクラクションに驚いて牛が動かなくなった。駆け付けた警官は、「車は静かにさせるから、牛の機嫌を早く直して動かしてくれ」と言っていた。私たちは牛の首筋を撫でたりして何とかその場をしのいだ。

学校を休んでの収納であったが先生の校外学習扱いという配慮で私は皆勤賞を頂いた。その後、私の家では高校を卒業した兄の就職を機に葉タバコ栽培を止めた。

葉タバコ作りは大変な仕事であったが、自然との向き合い方や地域での助け合いが勉強になり、その後の人生において大いに役立ったと思っている。あれから約六十年経過、市内には今も黄色種タバコの乾燥室が十棟程遺されている。葉タバコの産業遺産として保存できないものかと考えている。

▼新入会員です よろしく

南地区 信田 和子

大根地区 栗原 博

門倉 俊男

西地区 谷 敏夫

厚木市 芥川 律

◆令和二年度総会のお知らせ

秦野歴史おこしの会総会を左記により開催いたします。

日時 令和二年五月十日(日)

午後一時から

場所 秦野市立本町公民館

多目的ホール

議案 (一)令和元年度事業報告並び

に決算案について

(二)令和二年度事業計画案
並びに予算案について
その他(一)各委員会活動報告
(二)「ささら踊り」披露

◆講演会のお知らせ

日時 令和二年五月十日(日)

午後二時半から

※総会終了後、同会場にて開催
演題 「柳川村与兵衛と漆あきない
―秦野地域と漆―」

講師 桐生海正先生

県立足柄高校教諭

旧芦川家住宅主屋(緑水庵・蓑毛)が、
国の登録有形文化財(建造物)に登録
されました。

トピックス



◆表紙の題字

「善哉(よいかな・よきかな)」

揮毫 蓑毛山寶蓮寺

三十三世住職 東島光明師

『寶蓮寺真名縁起』によれば、聖武天皇の命を受けた行基と良弁が、伊勢の皇大神宮に赴き大仏造立の願いが叶った時、歓喜して舞い、歌い、言ったことばが「善哉、善哉、時哉、時哉」である。〈会報第三号から要約

◆「善哉」への投稿依頼

身近な歴史や文化についての感想、旅先で出会った仏像や神社仏閣についての思い出、独自の研究成果などがありましたら、お気軽にご投稿ください。

〈編集後記〉

今号から、一層読みやすく手に取っていただけるよう、紙面を刷新しました。会報は、会の活動を知る一番の手がかりです。これから、広報委員が力を合わせて、関心を持っていただける紙面づくりをしてまいります。

事務局

秦野市羽根七〇七

小泉 孝 宅

電話 〇四六三―七五―〇〇六七